



「菅原」初演の太夫、人形遣のこころなど

吉 永 孝 雄

「寺子屋」が當代最高の名手、豊竹古親太夫、吉田榮三、吉田文五郎によつて上演されてゐるのに、因んでこの淨瑠璃の初演の時のことを書いて見ます。

この作は延享三年八月廿一日、今から約二

百年前竹本座で興行されたもので、作者は竹田田雲、並木千柳、三好松洛、竹田小田雲で近松の作の天神記を藍本としてそれに色々の傳説を取入れ趣向をこらしたものです。この近松の作には既に白太夫も松王、梅王、櫻丸ならぬ荒藤太、小松、小梅も出て來ます。三人を三つ子にしたのは當時、天満で三つ子を生んでお上から五十貫文の烏目を下されたのを當て込んだものであり、武部源藏の名は傳内流を開いた江戸の書家建部傳内から思ひ付いたものと言はれてゐますが人物は天神記の兼竹から來てゐます。而もこの淨瑠璃は天神

記の様に菅公を中心としないで三人の兄弟夫婦を中心に巧みに事件を展開してゆきます。柳亭種彦の説として、大槻如電が梅彦老人が師説として毎々語る話として述べて居られる所によりますと、

竹本座は不入續き、持堪へさへ覺束無く、必死の場合に立至り、申候に付、三人にて首を刎め天神様へ祈誓をかけ、此曲を合作いたし申候由、其上親子の別れといふを三ヶ處入れる相談ありて一人々々に引受け、最初菅丞相と刈屋姫との生別れは千柳の筆とか、次に櫻丸腹切にて白太夫と死別は松洛の手に成り、終りに出雲が工夫に出でたる松王夫婦が小太郎との首の別れ、いづれも親子の別れなど一々其狀を殊にし見物をして其重複を覺えざらしめし技倆は古今の名作にて又古今の大當り、竹本座も蘇生と

相成申候と傳へられてゐます。全篇は言ふ迄もない事です、

(大序)大内の段。(口)賀茂堤。(切)筆法傳授。(跡)築地。

(二段目)道行。(口)汐待。(切)道明寺。

(三段目)(口)車曳。(切)佐田村で茶筌酒、喧嘩訴訟、梅丸切腹と展開し。

(四段目)筑紫配所。天拜山。北嵯峨隱家。

(切)寺子屋。

(五段目)大内

に分れ今日行はれる松王屋敷は後の蛇足であります。勿論の中、今度上演されてゐる寺小屋が最も有名で又、最も勝れてゐますが此の淨瑠璃は非常な好評をうけて、翌四年三月迄八ヶ月打續けられました。淨瑠璃譜には、此淨瑠璃、古今の大入。別して吉田文三郎

役。菅丞相、白太夫、千代三役なり。菅丞相の装束に梅鉢若松の統、今に歌舞伎にも替らず、松王、梅王、梅丸、三人とも惣髪にて、黄色、大郡内島、八掛紅なれば大坂を始め、國々にても三つ子と見え。是吉田文三郎が仕初めなり。今歌舞伎芝居にて松王を勤める役者、三段目時平公の諸太夫ちやと云ふ姿で出れども甚だ悪し。右菅原の役割爰に出ず。作者、竹田出雲、三好松洛。

同 其太夫
同 柚太夫

の操評判記にも柚太夫、其太夫といふ名は見當らず、文字太夫、友太夫はちゃんと載つてゐますので番附の方が正しいと思ひます。尙番附によりますと三味線は鶴澤友治郎、竹澤伊左衛門、鶴澤本三郎、鶴澤平五郎で人形の役割は

齊世親王

左大臣時平、梅王丸

三よし清つら

左中辨希世、土師の兵衛

春藤玄蕃

てんらんけい

輝國、武部源藏、櫻丸

菅丞相、女房千代、親四郎九郎

松王丸、宿彌太郎

御 台

娘かりや姫

菅秀才

伯母覺壽、女房八重

娘立田、女房春

女房戸浪

僧じやう

小太郎

あら嶋ちから

土佐市十郎

桐竹助三郎

吉田清次郎

淺田太四郎

桐竹源十郎

桐田千蔵

桐竹門三郎

吉田文三郎

吉田 才治

吉田文十郎

辰松 源助

吉田八太郎

山本伊平次

三浦新三郎

桐田 甚六

吉竹 平八

土佐 幸助

淺田元三郎

初 段 大序

中

切

道行

口

中

切

口

三 段 目

口

四 段 目

口

五 段 目

かけ合

竹本此太夫
竹本百合太夫

竹本錦太夫

竹本紋太夫

同 柚太夫

同 紋太夫

同 島太夫

同 政太夫

竹本百合太夫

同 此太夫

竹本政太夫

同 錦太夫

同 島太夫

竹本紋太夫

右淨るり、五段目、時平の人形桐竹助三郎松王丸桐竹門三郎、女房八重、山本伊平次相勤め、道具を左右へ引明くれば、天満宮の宮居、正面に鎧り、島居玉垣石燈籠も細工美を盡し、社の内には菅丞相の人形をかざり、竹本此太夫、竹本島太夫、竹本政太夫、其外の太夫、神主の姿にて拜をなす故あまたの見物有難く思ひ、賽銭山の如く上りしとなり。此砌の人物甚だ正直なり。吉田文三郎菅丞相の人形遣ふには毎朝別火を食し、水をあびて是を勤む。榮屋にて右人形は荒鷹をしき、御酒をさしげ、神の如くに拜するかれいなり。大序勤むる太夫も初日より七日は吉田文三郎と同じく慎む故自づと朝より舞台嚴重なり。此砌はあやつり役者上下五十人餘も一座にありし故物事自由なり。

とあります。所が當時の番附では二段目道行の柚太夫の所が友太夫となつてゐ、四段目は政太夫と島太夫だけで錦太夫がなく、五段目は竹本友太夫と、竹本文字太夫になつてゐます。これは當然番附に従ふべきであり又當時

となつてゐます。

これ等の太夫、三味線、人形について其の藝に觸れたものは一部、有名な竹豊故事、淨瑠璃譜等に散見してゐますが、何れも詳しい記事はなく、而も竹豊故事は寶曆六年の出版で九年後のものであり、淨瑠璃譜は安永天明年間の出版で卅年以後のものであつて、當時のこれ等の人々の藝風や人氣がわからぬ恨みがありますが、こゝに幸、菅原傳授手習鑑の上演された翌年の延享四年には操曲浪花蘆と浪花其末葉とが出版されてゐますので當時の太夫三味線人形の評判や特色をはつきりと知る事が出来ます。浪花其末葉は其の全文が徳川文藝類聚第十二卷評判記に繙刻されてゐますので主として豊竹古靱太夫御所藏の浪花蘆によつてそれ等の人々を紹介しましょう。(尤もこれも一部は新群書類從第二卷演藝篇の南水漫遊拾遺に引用されてゐます。)浪花其末葉の大阪三芝居操評判の淨るり太夫之部見立扇子づくしには

總巻軸

大上上吉 竹本此太夫

御功者に見物も耳を揃へた金扇子

上上吉 竹本政太夫

師匠の名まであげはの朝鮮扇子

上上吉 竹本島太夫

御出世は次第へに束廣扇子

上上吉 豊竹上總太夫(竹本紋太夫事)

御名を聞いて好ましい箱入の銀扇子

上上吉 竹本錦太夫

節付の名人身内が拍子扇子

上上吉 竹本文字太夫

開からに花やかな間拍子のよい舞扇子

上上士 竹本百合太夫

うつくしきは粹らしい加賀扇子

上 竹本友太夫は其他大勢の所にあり、浪花蘆には一口評に

大上上吉 竹本此太夫

此人のうへを玉子酒といふ。心は下ほど味みがある。

上上吉 竹本政太夫

此人を兵庫渡海といふ。心は播磨迄は行かぬ

上上吉(白吉) 竹本志摩太夫

此人の上りを鞍馬のふごおろしといふ。心は上より下へ取る。

上上吉(白吉) 竹本錦太夫

此人を太夫年寄といふ。心は上りの事知り

上上吉(白吉) 豊竹上總太夫(註一竹本紋太夫也)

此人の聲をよくな馬方といふ。心は第一二かはるはさて

上上吉(白吉) 竹本文字太夫

此人の音曲、雪降といふ、心はしつぱりとして面白い。

上上士 竹本百合太夫

此人の聲を星月夜といふ。心は上が賑はしい

上上士 竹本友太夫

此人をいかのぼりといふ。心は空でやう鳴る

二書多少の出入は評判記であるから當然の事ですが、兎に角これで菅原傳授手習鑑の初演の時の太夫の位置がわかるのが有難い事です。つまり、此太夫、政太夫、島太夫までは位置が動いてゐない。そして今日の櫓下に當る此太夫が大序と三段目切を語つてゐます。それではこれからその一人一人について解説してゆきませう。

大上上吉 竹本此太夫

「浪花蘆」に

此太夫は初は美濃太夫と云ひし。内の名は合羽屋伊兵衛とて若年より此道を好み、ついに商賈もせんくわとなり、もみぬいたは合羽より淨るり、第一聲は下のつよいを受合合羽、三重の聲のつきめも、のりじつよ

ふ、つやなきに油を引き、ぎんうつくしう
かち合羽、修羅段切の手しぶきに、木しぶ
をまぜて、つぎめよふ、語り給へどさすが
にも、うしろの段は見物も、袖合羽をしほ
りつゝ、ついにつぎめはなるゝほど、見
物もじゆくするは、あつぱり功者名人なり
去るによつて此人を市山助五郎と見立て
し。なぜといへば、先づ藝の一昧功者にて
何を語らしても間に合はぬと云ふ事なし。
先づ地事、ふし事、所作、やつし、修羅、
段切、詰などの味ひ、あまり功者にて仕過
る事多し。さるよつて、ふし付細かにして
新ぶし多し、夫故町方にても此人の通りは
かたりがたし。其人はおも白く、名人なれ
ども、まねの出来ぬは難哉／＼。

とあります。此太夫は寛延元年八月の假名
手本忠臣蔵の時、大序と九段目とを語つてゐ
ますが、この時人形の吉川文三郎の衝突があ
つた事は有名な事件で淨瑠璃譜にも

新淨りりの折から古今の大入なれど、少し
大もめありて當十より、此太夫、島太夫
百合太夫、友太夫、對座なし、東豊竹越前
の芝居へ相住し故、立物の太夫多く出座せ
し事なれば、是非に及ばず替り役にて、政

太夫、錦太夫東より入替りし、千賀太夫、
長門太夫、紋太夫事、上總太夫と改名、内
匠太夫事、此冬大隅掾と受領し、此人數に
てやはり忠臣蔵を同年十一月迄相勤、十月
に間有てやはり替り役にて繁昌せしはど
だいの狂言が能き故なり

とありますが竹本長門太夫の増補淨瑠璃大
系圖にはこの事情を更に詳しく説明して陸奥
伊太夫（元文十二年十月太政入道兵庫卿に竹
本美濃太夫と改名、元文三年八月、小栗判官
車街道に竹本此太夫と名乗る）の條に、

假名手本忠臣蔵此淨瑠璃の役割九つ目と七
つ目掛合由良之助とにて古今の大當りせし
が人形由良之助の役吉川氏の元祖文三郎な
り。右由良之助の紋に二つ巴を付けしは此
文三郎の定紋也。今の世に至り操り又は歌
舞伎等にて此紋を付るとかや。然る所餘程
興行致して後文三郎此太夫へ申しけるは扱
先達てより申し入れ度く存ずれ共控へ候へ
しが打明けて談じときは九つ目にて「仕よ
ふを爰にて見せ申さんと庭に」此間もそつ
と延ばして語り下されと申ければ此太夫申
すには何事かと存ぜしに只今となつて日數
も語りし故節地合等少しにてもかへる事成

りがたしと申しける。文三郎申すにはさあ
らんと思ひしゆへ今日迄控へ申したり。私
も吉川文三郎なり。云出したる事反古にな
つては門弟共へも聞え濟まぬ何分庭へおり
て駒下駄をはかせ竹の傍へゆく間が遣ひに
くしと段々わけを云へども承知せざれば兩
人あらずひ果てず血相かわれば皆々打寄り
て双方引分漸く宿所／＼に送りかへし跡に
ての評議まち／＼なる中に内々にて申すに
は當時文三郎程の由良之助は有るまじ。左
あれば文三郎を留め置き此太夫和陸せざれ
ば致し方なく、此太夫を休ませ幸いに此ご
ろ大隅掾（後大和掾也）病氣本腹なれば是
を出勤させ、九つ目を掛合由良之助を語ら
すはいかゞあらん。すゝんで大入けうたが
ひなし。されば此太夫方へ頭取を以て座本
より暫く相休み下さるべしと斷りを云はせ
て又大隅方へは出勤の事竹川雲自身に頼
みに參られければ大隅掾より此太夫方へ扱
捌に及ばれ早々出勤致されけるに大入大繁
昌致しけれ。扱此太夫はひみき連中より東
の芝居へ出勤致候よふすゝめに付寛延元年
戊辰十一月右の譯合故島太夫、百合太夫の
兩人も隙をとらせて此兩人を召連れ東の芝

居へ出勤を致すなり。是則ち東西混亂の始なり。是より後は豊竹の座がしらと成越前少掾の跡を繼ぐ同二年己巳十一月受領有つて豊竹筑前少掾となる。最此淨瑠璃語りの仲間には前々より禮儀正しく致すは更なり。其時出し忠臣蔵丸本を出せし時右の次第にて心よからぬ事にて東座へ出勤し又半ばより大隅掾同役を語られ是も評判宜敷候得共右出せし本の七つ目掛合には(此)由良之助役はかくのごとく此太夫にて出せしは俗に云ふ昔も今もかたくりしく後々の人がよぶなる事を聞傳へて守る事なり」

とあります。後寶曆七年八月「清和源氏十五段」の大切「山伏攝待の段」を一世一代で出語りを勤めて明和五年十一月五日六十九歳で歿して居りますから菅原を語つた時は四十七歳でした。

上上吉 竹本政太夫

「浪花盛」に「政太夫は雄喉場重兵衛とて元來魚屋の鮎より出で、猶愛深し。播磨どのへ弟子入りして、此道を鮎の見入れし如く毎日稽古に飛魚と心に誓ひ立ち魚の長う短うふし附の細かき事は江鮎子の如し」とあります。寛保三年十月竹本座の「大内

裏大友眞鳥」が初舞台で二段目を語り若い播磨少掾だ和大坂中の評判をとり(淨瑠璃譜)

「段々出世、名を上げられ、次第にうまもつき、白を腹に抱へて飛抜けの出世は、今でござらしや、播磨殿は鮎なれや、同じ姿でも大小の違ひ、しかし芝居へ出られし頃より餘程聲も大きになり、淨瑠璃の一體風も變り、功者なれども少し癖有り、第一淨瑠璃を練る事あたかも鮎の百尋程長し、夫故人形三味線の間も折にははづれ易し。此人をたとへば岩井半四郎に同じ。何故といへば當世藝にて何事も面白う致し、別してやつし、世話事の達人なれば、半四どのに釣合せしは、先づ師匠播磨どのも見込み給ひし故ぞかし。此上は少しづつ、癖を御たしなみ有つて氣を付給へば次第に名人の部に入給ふべし」

と結んでゐます。延享元年十一月、播磨少掾追善として其の得意の語物八曲を綴合せた「八曲篋掛繪」の二の切を語り(三の切此太夫、四の切島太夫)翌延享二年七月「夏祭浪花盛」の書卸しは人形に帷子ひとへ衣裳で目

新しく人氣をとり歌舞伎をして顔色ならしめたのは人形造吉田文三郎の工夫手柄により

ますが四冊目と七冊目のかけ合は政太夫でありました。「菅原」の時は三十七歳で次の年には「千本櫻」で四段目中「河連館の段」を語つてゐます。この時源九郎狐の人形を廣袖に源氏車の模様、だんだらの丸解にしたのは吉田文三郎が工夫ではありますが、これは源九郎だから源氏車にしたのではなく、こゝは最初から狐と見せない故玉もつけられずいろ／＼と工夫してこの狐場をつとめる政太夫の紋所が源氏車であるので、源氏のゆかりで源氏車の模様を付けたので、歌舞伎でも此の姿で出ぬと源九郎狐めかないと言はれてゐます(淨瑠璃譜)

「忠臣蔵」の時に東西入替りの大騒動が起つて此太夫、以下が東豊竹越前の芝居へ移つた時には、政太夫は竹本座に残り、寛延二年十一月の「布引瀧」の三段目、寶曆九年二月の「日高川入相花王」には大切の用明天皇饗入之段を出語りでつとめ明和二年六月「御祭禮棚閣車操」興行中病氣になり同七月十日五十六歳で歿してゐます。

上上吉 竹本志摩太夫

大阪内周防町の人。初名竹本志摩太夫、次名、竹本島太夫、豊竹島太夫。二代豊竹若太

夫。「浪花蘆」に

「志摩太夫は八百屋平右衛門とて青物商賣なりしが、まだ前髪之三つ葉四つ葉の頃よりも筑後ふしになづみ、うき身をやつし、商賣片手に一口淨瑠璃を語りし頃は、まだ青海苔や、ねぶか淨瑠璃の節なしなるが、夫より座敷、稻荷の稽古場へ入込み、稽古本に節付を芥子の如く附けて吞込みもよしのがや、次第にむま味もつるし柿、難婆も嫁菜も打まじりて聞きにあつまる。折しも竹本へ抱へられ、」

元文四年四月「ひらがな盛衰記」に三段目口篋引の段を語つたのが初舞台で（淨瑠璃譜）「自然と音聲備り語り、語り出しの大きさは倉橋の大根強う働られしが節附も生妻も長崎迄も最負よく替りの段々當り目多し、殊に修羅、詰、荒事は大丈夫なり。例へば中山新九郎に同じ藝者にて、一體を崩さず、語りひしぐ事すまじく、御座の方は誰にか劣り給はん、此上はふし附むま味の鍛錬氣を附給へ、夫さへ調へば恐らく恐るべき事も有るまじ肝要——」

とあります。「夏祭」には六冊目と、九冊目、「菅原」の時には押しも押されもせぬ太夫

となり、二段目中と四段目切「寺子屋」を語

り、「千本櫻」では三段目、口、「椎の木」と

四段目切を勤め、次いで寛延元年の「忠臣蔵」に六段目「勘平住家の段」を語つて好評

を博しましたが、東西入替の時此太夫に付いて豊竹座に移り、寛延元年十一月「攝州渡邊

橋供養」には此太夫と共に出て豊竹島太夫と

名乗つて大序と四段目切とを語つてゐますが

二年三月迄大入で、次でかしくの獄門と岡と

六の心中を御駕籠の刃傷事件とを続合せた十

八、九日の事件を廿日に看板を出し廿六日に

初日で開いて古今稀な早わざと大坂中の評判

をとつた「八重藤浪花漬萩」に六冊目新やし

きの段をつとめ、寛延三年八月「和川合戦女

舞鶴」に二代目豊竹若太夫を襲名「和歌八景」

を出語りし喝采をうけ。「俊艶絶妙音聲無類」

（竹豊故事）と言はれ、寶暦元年十二月の

「一谷嫩軍記」には二段目奥と四段目切を語

つてゐますが、この淨瑠璃は古今の大入りで

翌年の盆盆から大切に採り踊りをつけて續け

ました。寶暦六年三月の「義仲勳功記」には

四の切をつとめ、翌七年八月「清和源氏十五

段」二度目の時「山伏攝持の段忠臣幡そろひ」

に豊竹筑前少掾が一世一代の出語りを勤め引

退して後は座頭となり、同年十二月「祇園祭

禮信仰記」には大序と三段目切とを勤め明和

三年正月竹本座に復歸して「本朝廿四孝」の

三段目の切を勤め同四年九月椿下となり、豊

竹座再興に豊竹島太夫となつて豊竹座に入り

紋下の太夫として聲譽を高め安永四年三月大

坂で一世一代として「菅原」の四段目を語り

同八年京都の一世一代に「菊笠」をつとめた

した。天明四年九月十日病死、大阪下寺町法

善寺に葬られました。寶暦期の名手で作曲も

よくし、殊に「八重藤」の新屋敷の段「菅原」

の四段目、「勳功記」の四段目切などが得意

でした。

上上吉 竹本錦太夫

攝津天王寺村狐小路の産。「採曲浪花蘆」

に

「錦太夫事、内の名は綿屋武兵衛といふ。初

めて筑後に出られし名は知佐太夫、其比よ

り上手なりしが暫く休足有つて」

とあります。播磨少掾を師として精進しま

したが天性の惡聲で小音であるので豊竹座に

頼み、元文二年七月「釜淵雙紋巴」に始めて

出座しました。（淨瑠璃譜）これは大入で寛

保三年八月芝居で海老藏の鳴神上人、菊五郎

の雲のたへまで大當りをとつた狂言を操りに改作した「久米仙人吉野櫻」に太夫元の越前少掾と内匠太夫と、胸太夫と和佐太夫と懸合で勤め大當りをとり翌延享元年四月まで勤めました。(淨瑠璃譜)。鼻へかゝる悪聲年ら世話をよく語りましたが播磨少掾歿後二代目政太夫に招かれて若縁により竹本座の爲奮闘する事になりました。即ち延享元年十一月二度目の「ひらがな盛衰記」と「八曲鏡掛繪」に錦太夫と名乗つて用語りを勤めてゐます。

「浪花蘆」には

「又又竹本座に住む時、改めて古郷は錦を鏝れといふ義を取りて錦太夫となづく。淨瑠璃は恐らく誰にか劣りなされねど何分座柄あしくて、残念なり。然し淨瑠璃は川中での事知り惜へば姉川新四郎と同じといへば脇よりそれはどうした見立ぞといへど中々此人は、すい方へ、取る淨瑠璃、さるによつて新四郎のと見立てしは張強きとの事かや」

播磨少掾の死後、淨瑠璃の列がきまり、初段切錦太夫、二の切政太夫、三の切此太夫、四の切島太夫となつて延享二年七月の「夏祭浪花鑑」には三冊目と七冊目のかけ合を語り

同三年八月の「菅原」では序切と四段目奥を同四年十一月の「義經千本櫻」では四段目口を、寛保元年八月の「假名手本忠臣蔵」では三冊目奥、七冊目かけ合、十冊目口を語りました。この間延享三年正月「楠青嶺」のどんぶりこで太當りをとりましたが、明和四年十一月曾根崎芝居のみどり淨瑠璃で「役行者」二の切を語つたのを最後に引退しました。歿年不詳。

上上士 竹本百合太夫

「浪花蘆」に

「此人生國丹州なり鼈打栗の頃より専ら語り出されしが淨瑠璃も餘程上達されし、然し律義なる音曲にて餘りとんだ節を語らず、夫故左程當り目も少なし。なれども一體淨瑠璃に無理はなきなり。例へば三保木七太郎、藝に同じ功者なれども、當らぬは何の故ぞや。」

とある。「ひらがな」の二段目中、四段目口、「夏祭」の一冊目のかけ合、五冊目の跡を、「菅原」の序中と三段目口を「千本櫻」の二段目中と三段目奥を「忠臣蔵」の二段目五段目を語りこの時の東西入替りに此太夫について豊竹に移り豊竹百合太夫と名乗り「攝

州渡邊橋供養」では二段目切と四段目奥を、「八重藤浪花漬萩」では一冊目かし座敷の切と七冊目神崎のかけ合を語り寛延四年十月の「日蓮上人御法海」の時どうした事か京都へ行つてしまひました。

○ 竹本紋太夫

通稱堺屋半兵衛。はじめは播磨少掾の門人で寛保元年五月竹本座初舞台、「夏祭」では二冊目、五冊目の道行を「菅原」では二段目道行と口、五段目をかけ合で語つてゐます。所が延享四年豊竹座に轉じて豊竹上總太夫となつてゐるので「浪花蘆」では

上上吉 豊竹上總太夫

「やつちや／＼しばらく此御方を及ばずながら紋盡しにて譽め申さう。京より御下りなされ竹本芝居に住給ひし御名は紋太夫、其の頃はまだ葵ぢやと世上で人の惡口は逆おもだかかはは聞手のきつい輪違ひぢや。聲はなやかに花菱や、ひらく扇の手拍子も慕も打ぬく朝風、朝顔よりも語り出し、ひるまぬ聲の丈夫さは巴の丸のくる／＼と廻り出したる水車、淀の川瀬の川風、三重郎に見立てしは違ひ有るまじ、武道一巻せりふ聲色、さつぱりとしてよし、しかし是迄は

上落が出来安けれど是からが上りにくし、
氣を付給へ吉の字がまそつと白し。

とある。翌五年十月竹本座に復歸しました。

竹本袖太夫と其太夫の事は「浪花蘆」にも
觸れてないので大した太夫でなかつたらしい
但し番附では淨瑠璃譜と違つて道行の袖太夫
の所が友太夫となり、五段目かけ合の紋太夫
其太夫、袖太夫の所が友太夫、文字太夫とな
つてゐますが、この兩人は「浪花蘆」にある
ので紹介しますと、

上上吉 竹本文字太夫

「此人音曲になづみ、雨の夜も風の夜も通ひ
小町なんなく淨瑠璃の間におふむ小町、片
時も早く芝居へ出んと、明け暮れ、心蘭寺
小町、ついに床に直つて語らるゝ、尤も淨
瑠璃小兵なれども、氣を附給ふ徳には、ふ
し事地事、よし修羅話の類ひ、ちと甲斐な
き音聲、此人を山下又太郎と同じ藝、仕う
ち手弱けれ共、取まはし功者にて見物うけ
よし。」

とあります。又友太夫は

上上士 竹本友太夫

友太夫は音曲に心を盡しもしみ込んだる故、
今竹本座へ出るやうになつたるは誠に音曲

のせいに入りし徳ぞかし。然し何と云ふて
も出られてより間もなき事なれば滞る事あ
り。随分氣を付けて語り給ふべし。此人を

戯曲の方言

知 切 光 歳

方言の問題に就いては、まいど苦言をい
たいてきてゐる。が、作家の中に純粹の
標準語の會話を操つてゐる人が一人もない
やうに、純粹の方言をもつて戯曲を進行さ
せてゐる人も一人もゐないだらうとおもふ
ある程度觀客にも讀者にも解つてもらひた
いからこそ、そこに方言の苦心も生れるの
だとおもふ。譬へば眞船豐氏の東北語は結
局眞船語の美しくさである。阪中正夫氏の
美くしい紀州辯は阪中語の苦心である。一
久保田万太郎氏の會話もやはり東京の方言
と呼ぶべきであらうが、これも氏一流の久
保田語に外ならない。

一番、標準語に近い會話を操るのは、武
者小路實篤氏と岸田國士氏ださうであるが
これとても随分と、癖の多い言葉である。

譬へば吉川萬四郎、藝ぶりに等し。そは
として、さながら藝のやうなりといふ
以上で太夫の紹介を終ります。(未完)

第一純粹の方言を驅使して、判るはずがな
いし氣分が出るものでもあるまい。翻譯家
の使用する會話など、標準語のつもりであ
らうが、蕪雜なものが少くない。

時々刻々に推移してゆく日常會話に標準
語を追はなければならないことは勿論だが
そのまへに、うしなはれ忘れられつゝある
古い言葉のうちから、いろ／＼の美しい言
葉を拾ひ出して、われ／＼の日常の語彙を
潤澤にし、また美しくしてゆくことは、言
語學者よりもむしろそれを自在に驅使して
みせる戯曲作家の仕事ではないかとおもふ
東京中心の文化を形成する前に、京阪地
方で咲いた文化の華のうう、狂言や淨瑠璃
の會話のなかの言葉など、すでに捨てられ
忘れられつゝある言葉も、地方などに残つ
てゐるものが非常に多いのも文化の地方的
推移によるせむがあるとおもふ。

(三月廿三日東京新聞)